

Youth for Ofunato

2012.08.06-09.17



「とても楽しかった。」

この2週間の活動を終え、感想を聞かれると私はこう答える。

大抵の人から返ってくる言葉は「え？ボランティアなのに？」というものだ。

たしかに、この派遣活動は震災復興のための「ボランティア」として行われている。

しかし、GWの活動を終え「ボランティア」という言葉に違和感を抱き始めた私にとって、大船渡での活動は、「大船渡の人々と関わりたい」「共に何かをしたい」という気持ちゆえのものとなっている。

今回の活動を終えて、改めてそう強く感じている。

しかし、とにかく「楽しかった」ゆえに悩んだ2週間だった。

ただ「楽しい」だけになっていないか。

どれだけ真剣に活動に向き合っているのか、どれだけ活動の意味を考え、意識しながら行動できているのか。「人と人をつなげるチャンスは常に私たちの目の前にたくさん転がっている。それをどう生かすかは自分次第。」

というChildFund Japanのスタッフの方の言葉が心に響いた。

「考えることはいつでもできるから、今はここでしかできないことをとにかく体験するといいいのでは。」

というアドバイスもいただいた。杉下の住民の方にも相談させてもらった。

このおかげで「全力を出し切ろう。」と新たな気持ちで、残り5日間活動に向き合うことができたと思う。

特に、長洞仮設団地でのお祭りのクイズ大会のチーム作りのサポートや、友結ファームのアピールは、気が付くと自然な姿で積極的に動いている自分がいた。

「楽しい」という気持ち。これは何の活動においても基本にあるべきものだと私は思う。

同時に、なぜそう感じられているのかを深く考える必要はないのでは、とも思う。

自分のありのままの姿で、頑張りすぎず、でも頑張って活動に臨み、そして楽しいと感じられるのであれば、それはまわりの人のエネルギーとしてつなげていけるのではないだろうか。

杉下の住民の方がおっしゃっていた

「君たちが楽しめないと私たちも楽しめない。」

とはこういうことなのかもしれない。

出会った方々が温かく迎えてくれたのが本当に嬉しかったです。大船渡に行くまで、被災者の方とどう接したらいいのだろうとずっと考えていました。大切な人を失った人もいるだろうし、とても怖かっただろうし、震災について触れてほしくない方もいるかもしれないと考えたからです。

しかし、被災者の方々は自分からあの日のことや今感じてることを話してくださる方もいらっしゃいました。被災者の方々の生の声を聞くという貴重な経験ができました。さらに、私が想像していたよりも元気に、前向きに復興に向けて頑張っていて驚きました。活動に参加するまで、少しでも被災者の方々に元気を分けてあげたいと思っていたけれど、逆に元気をもらいました。私ももっと頑張らなくてはと思いました。

文学部4年



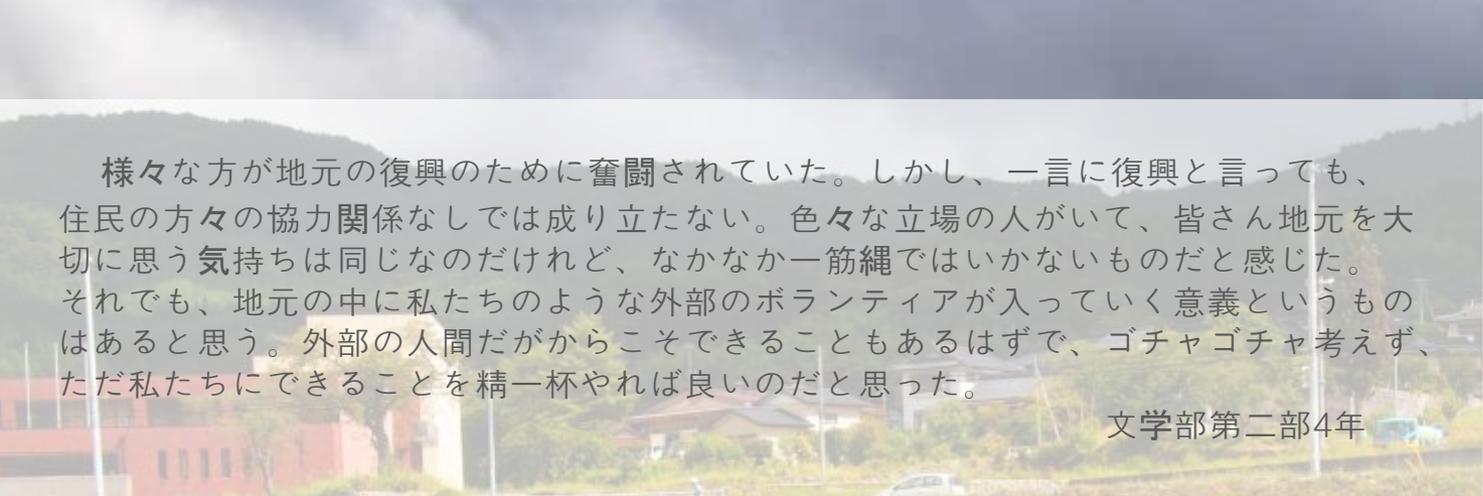




多くの出会いの中で心に残っているのは長洞でのテーブル作りの呼びかけでお話した方との会話です。その方は仮設の住環境、集団生活は嫌だというお話をしていましたが、プランターでお花をきれいに手入れされていて一つずつお花の紹介をしてくださりその時の愛おしそうな表情が印象的でした。近所の方とお花の話をしたりや飼い猫を預かってもらったりするということを知り、ご近所との交流は確かに存在し、大好きなお花を育てたり猫を可愛がったり日々の楽しみを持って前を向いて生きていらっしゃるのを感じられました。

この一週間人のエネルギーや温かみを感じ、一人で悩んだりメンバーに話を聞いてもらったりと人と自分と向き合う充実した特別な日々を過ごすことができました。もっと周りを見て動けたはず、もっと活動の意味を考えて動くべきだったなど反省すべき点はいっぱいあります。大船渡で得たことをこれからの生活にも生かし、これから先も何らかの形で大船渡の人の笑顔のためにできることに関わっていきたく思います。また大船渡を訪れ、出会った人々にお会いしたいと心から思っています。

国際政治経済学部3年



様々な方が地元の復興のために奮闘されていた。しかし、一言に復興と言っても、住民の方々の協力関係なしでは成り立たない。色々な立場の人がいて、皆さん地元を大切に思う気持ちは同じなのだけれど、なかなか一筋縄ではいかないものだと感じた。それでも、地元の中に私たちのような外部のボランティアが入っていく意義というものはあると思う。外部の人間だがからこそできることもあるはずで、ゴチャゴチャ考えず、ただ私たちにできることを精一杯やれば良いのだと思った。

文学部第二部4年



初めて行った大船渡、越喜来。山に囲まれ自然が多く、海がきれいだった。大津波が襲った地とは思えないほどであった。表面的な印象はそうであっても、大船渡が抱える問題はずっと大きいはずである。1週間ではすべての問題は見えてこなかった。一言でコミュニティ形成と言っても簡単ではない、そう感じた。今一度、大船渡が抱える問題を見つめなおし、その問題に対し僕たちが本当に大船渡の笑顔のためにできることを考え直さなければいけないと思った。

大船渡から東京に着いてすぐ、大船渡に戻りたいと感じたのは、自分の中ですごくやり残したことがあると感じたから。「大船渡の笑顔のために」全力で活動したいと思ったから、東京でも一所懸命活動し、再び大船渡へ戻りたい。

国際政治経済学部3年

私達の活動自体は必ずしも現地にとって直接的に意味や効果があるといったものではなかったのかもしれませんが、その活動が何らかの形で現地にとって良い方向に動き出すきっかけになれば、その時に初めて活動の意味が生まれてくるのだと思いました。なので、活動を終えた今、その意味や効果をすぐには求めずに、今後見守っていくことが大切なのだと考えました。

この1週間の活動を通して、長期的かつ継続的に現地を訪れて、いわゆる単なるボランティアとしてではなく、信頼関係を築きながら、もっと住民の方々に近い存在でありたいと私は思いました。

総合文化政策学部2年

私の中で、最も大きな変化だと感じたのは越喜来の人たちの温かい言葉や差し入れです。どうしてわたしたちの活動に対して理解を示してくれるようになったのか1週間考えました。

Child Fund Japanのスタッフさんが震災当初からずっと現地の方々とコミュニケーションを図って、様々な調整をし、わたしたち学生ボランティアが派遣されました。滞在する人は違えど、同じ学校、同じ団体が継続的にいることで信頼され、スタッフや学生の熱意に越喜来の人たちが心を動かされた結果なのではないでしょうか。わたしたちは越喜来を愛し、越喜来のみなさんもきっと私たちを大事に思ってくれてるからこそ、越喜来の人たちが私たちとかかわってくれたのだと思います。越喜来の人たちが受け入れてくれたからこそ、私たちは越喜来で活動ができるチャンスが与えられ、結果的には越喜来の人たちにもわたしたちにもいい影響を与えているはずです。これからも大船渡との結びつきはどんな形でも大事にしていきたいです。

国際政治経済学部3年







「一人でも多くの現地の人と関わり、少しでも多くの人の笑顔を生み出そう。」

私はボランティアに行く前、この様に考えていた。ボランティアをしよう、人の役に立とう、という一方的な思いよりも現地の人々と触れ合う中で私も、現地の方々にも、笑顔になれる瞬間があれば行った意味がある、そう思って活動に挑んだ。

しかし、実際に現地へ足を運ぶと、個人的な意見ではあるが、私が思っていたより人々は明るかった。明るく振舞っているだけなら話が違うかもしれないが、人々の生きようとするエネルギーに大船渡に復興の光を感じた。そして活動をする中で、現地の人々と笑顔を共有するだけでなく、恩着せがましくて好きではないが、人の役に立つ、自分の活動が自然と効果を生み出していたことがあったかもしれない。

総合文化政策学科3年

非日常から日常へ。

大船渡滞在日数、90日間。

大船渡を訪れることが、今までは特別なことに感じましたが、今では故郷を訪れるような感覚になってきている

ここでの出逢いは、一生のつながり。

いつか支援としてではなく、家族・子どもたちと訪れたい

国際政治経済学部3年

この6週間の活動はこれまで続いてきたこととこれから続いていくことの中のほんの一部でしかないですが、その時に私たちが大船渡に居たということが何か少しでも、出逢った人やその土地にとって意味のあることになっていたら…それが本当に「良かった」ということにつながるのではないかと思います。それはいつになっても私たちには分かり得ないことかもしれませんが。

「相手にとってそれがどんな意味をもつのか」を考えて行動するという事はボランティア活動に欠かせない点であるけれど、それは普段の生活にもすべてにおいて言えることです。私は大船渡で出逢った人とのつながりをこれからも大切にしていきたいし、ボランティアと被災者としてではなく、お互いに一人の人として関わっていきたいと思います。しかし、同時に、今後ボランティア活動として訪れるのではなくても、地元の人から見たら自分はよそ者のボランティアという立場であったこと、私たちがそこでやってきたことは常に忘れてはいけないし、責任を持たなければならない事実だと思います。震災の被災者でない限り分かり得ないことはいくつもあるし、大船渡に住む人の生活は常に復興の中にある一方で、東京で生活する私たちは忘れてしまいがちなこともたくさんあると思います。状況が変わっていく中で、いつも自分の立ち位置や相手との距離を確認し続け、これから大人になっても大船渡の人たちと対等なおつきあいが続いていけばいいなと思います。

総合文化政策学部2年





印象的だったのは、長洞団地の方々が、友結ファームを通じて新しい人間関係を築き始めている姿でした。人と人が知り合って関係を築くためには、きっかけこそ必要なものの、それは私たちが無理につくれるものではありません。また同時に、復興における主体はあくまで彼らであって、私たちではありません。そういった意味で、今回自治会が主導で開いたはまっぺしや、地元の棟梁さん主導の切妻建設のなかで生まれた人間関係は、私たちが理想とするコミュニティ形成のかたちにとっても近いものだったのではないのでしょうか。震災から1年半が過ぎ、少しずつ必要な支援のかたちも変化してきているのだと感じた1週間でした。

国際政治経済学部3年



6陣では大部分が長洞での活動でしたが、去年のAVSや今年のYFOとCFJの活動の積み重ねがあったため、長洞では私達の認知度が高く、非常にスムーズに活動することができました。2週間以上にわたって活動するメンバーと住民の方の関係が1週目の活動をするメンバーに波及していったことも今回、充実した活動ができた要因だと考えています。

今後は今回築き上げた私達と住民の方との関係、住民の方同士の関係を基盤にして自立を目指して住民の方が主体となった活動を支えることができれば良いと思います。

経営学部4年

ボランティアでは、「相手のために」という気持ちを持つことが大切だと思っていました。しかし、そうやってやっていることが、一人よがりになっていないか、相手への責任転嫁になっていないか。これは今年の3月に初めて大船渡を訪れた際、ミーティングで考えさせられたことです。それを受けて、今回は「相手にしっかり向き合って、自分のやりたいことやる」という自主的な気持ちをもって臨めた気がします。

震災をきっかけとして、つながりをもつことができた大船渡の方々、Child Fundの方々、青学の仲間。たくさんの人と正面から向き合って生活した1週間、厄介なことも、難しいことも、たくさんありました。しかし、それを乗り越えて、嬉しいことや楽しいことを共有できた時、「人とのつながりは自分を動かす原動力となる」ことを身をもって感じました。

教育人間科学部4年





私はYFOという団体も、被災地に足を運ぶのも初めてでした。4陣は去年YFOで活動した人がほとんどだったので、私は初めてなりの意見を提案できるように意識して活動しました。私が活動する中で、去年から作り上げられてきた成果をいくつも目にすることができたと思います。「人と人がつながる機会を提供する」という目標は時間がかかることではありますが、着実に目標に向かって進んでいると思います。

長期的な支援を行うからこそできる支援がコミュニティ形成です。震災から1年半が過ぎ、まだ学生が来る必要はあるのかという事を話し合いましたが、着火剤として少しでもコミュニティ形成に役立つのではないかと考えました。例え長期休暇にしか来られなくても祖父母の家に遊びに行く孫の様に、また機会があれば是非携わりたいと思いました。

国際政治経済学部3年



今回は去年から数えて3回目の大船渡でした。今回はYFOの夏の派遣最後の陣としてはまっぺし、ベンチ作り、あずまや建設、さんま祭りなど盛りだくさんの内容をしてきましたが、やはりどれにも通ずるのは「コミュニティ」の大切さであったと思います。外部からきた私たちが大船渡の復興に必要であろうコミュニティ形成をうながすことは不自然に思うこともありましたが、私たちがささいなきっかけ（ベンチ、まっぺし、あずまや等）を提供し、そこからは大船渡のかたがたに引き継いでいってもらうように仕掛けるのは、ただ要求されたものを与える支援よりも一歩すすんだ支援の形なのではないかと感じることができました。

文学部4年

「人と人とのつながり」を感じる理想的な場面に出会うこともありました。それは私たちの所為ではなく、その人達の日常に触れられただけです。（自分たちのした何かも巡り巡ったのかもしれませんが…）あくまで「知識」が実感として腑に落ちる瞬間でしかないでしょう。理想的なコミュニティ形成の一端を見かけたからといって、必ずしも「自分たちの活動が大船渡の復興につながっているのか」つまり「支援の効果」についての実感をえられるわけではありません。それに私が見たのは、人と人が信頼関係を築く段階のうちのきれいな部分がほとんどです。その表面をのぞけるくらいの位置でしか活動していない（できない）。自分たちの活動の限界と役割について何度も考えを廻らせました。

どれだけ「大船渡の笑顔の為になること」をやってこられたのだろう。やっぱり、できたことは小さく、学んだことや受け取ったものがたくさんあったなあと感じます。大きな経験をさせてもらった分、もらったものはいつかどこかで誰かに返していこう、そう思いました。そして、自分の想像やそれらしい理論、誰かが編集した情報…そういうものでは知ることができない生身の相手がそこで生きていて、そこに関わろうとしているということを忘れずに、何が本当にいい活動なのかを模索していきたいと思います。

総合文化政策学部3年



家の前で一人用のイスに座って「さみしい」とおっしゃっていた方の話がミーティングであがりました。皆で「自分たちに何ができるか」とアイデアを出し合う中で、スタッフの方が「その一人用のイスをベンチに替えてみたらどうだろう」とおっしゃったのです。

私は、去年2週間の活動の中でベンチの意味をあんなにも時間をかけて考え、理解していたつもりであったのに、そのようなアイデアを思いつけなかったことに、ただただ悔しい想いでいっぱいでした。人と人をつなげるチャンスはそこら中にある。常に活動の意味を考えながら、1つ1つの出来事や会話にアンテナを張ることで、もっと自分に出来ることがあったはずだと思わずにはいられませんでした。しかし、これは同時に私たちの活動の可能性がもっとあることを意味するのかもしれませんが。私たち学生が現地で活動を行うことで、仮設住宅の方々が家から出てきて人と出会う、また、学生にだからこそ色々なことを話して下さったりもする。だから私は、また実際に大船渡を訪れて、人と人がつながるきっかけをみつけない、そのきっかけから生まれた小さなつながりが育っていく様子を見届けたいと思っています。

お世話になった越喜来の方がおっしゃるように、コミュニティの最小単位は1対1。この出会いを大切に育てていきたいと思っています。

国際政治経済学科4年





一週間の中で、現地のみなさんの前向きに生きる力、エネルギーをたくさんもらいました。むしろ私ばかりエネルギーをもらって、なにかお返しができていたのかと不安な部分もあります。ですが、活動の中で感じたこと、得たことをそのまま自分の生きる力とし、私は東京でしっかりと生きていきたいです。そしてその力を自分でもっと大きくさせて、また大船渡のみなさんにお返しできるようにしたいです。それが、今の私にとっての「共に生きる」ということです。ですが、これが私の最終的な答えではないように思います。

東京で生活し、大船渡のことを考え、また大船渡を訪れ、「共に生きる」とはどういうことなのか、もっと深く考え、その時々自分なりの答えを見つけたいです。そして、それを活かすにはどのようにしたら良いか考え、自ら行動できるようにしたいです。

総合文化政策学部3年

ChildFund Japanさん、大船渡の方々、YFOのメンバーと、相談しながら活動を進められたので、自分達の陣の活動をする際に、多角的に見て考え、活動することが出来たのではないかと思います。

津波の映像、大船渡市の津波前と後の写真、視察を行い、改めて津波の恐ろしさと残酷さを感じました。東京に住んでいる私に何が出来るのか、そして、今回のこの1週間で私に何を出来たのか、やはり、まだ分かりませんが、今後も継続して私に出来ることを考えていきたいと強く感じました。

文学部4年





越喜来の人々をはじめ大船渡の人々は本当に温かい人ばかりだった。去年からCFJの方や青学の学生が築いてきた信頼関係もあるが、震災から一年しか経っておらず、あんなにも辛い経験をしたにもかかわらず、よそ者である私たちを受け入れ、もてなすという「相手を思いやる、気遣う」精神は胸を打つものがあった。私たちもその姿勢を見習わなければいけないし、これからは越喜来や大船渡のことは決して忘れずに、自分にできることを今後もしていきたいと考えた。

文学部4年

リグリーンの活動に参加した2日目、地元の方々は私達に被害に遭ってしまったがまだ越喜来にもきれいなところがあるし、越喜来を知ってボランティアをしてほしい、そして土産話のひとつにでもしてほしいと名所めぐりに連れ出してくださいました。

ボランティアとしての立場上、単純に喜んではいけないとその日のミーティングでも議題になりましたが、私自身、大きな被害を受けたにも関わらず、私達温かく迎え入れて下さり、きれいな所を見せてあげたいというそのところにただただこころを打たれ、涙をこらえるのが必死でした。それと同時に、本当に震災に負けず、前向きに進んでいこう、絶対復興するんだという力強い意思を感じ、私が励まされてしまいました。この日、初めて現地の方の温かさに触れ、何かしたい、力になりたいという想いは強くなりました。





ファームでのベンチづくりでは、何度も「友と友を結ぶ」「人の集まる場所」という大きな指針が示されていたにも関わらず、私の意識は長洞団地の人に「来ていただく」という意識になってしまいました。ミーティングで、どうもそれが違っているということに6日目ようやく気付かされました。



「ただ作業をすることがどれだけ無駄なことか、そして仮設の人に私達がお願いして来ていただくのではない。私達がきっかけをつくり、媒体となって、長洞団地の方々の足が自然にファームやイベントに向くように交友関係をつくるお手伝いをしなければならない」ということです。ようやくその日にボランティアの難しさも感じましたが、同時にその方向性が明確にわかったからこそ、最終日の活動では、目標とする「友結」を意識して、考え行動することができたように思います。まだまだ最終日に悔いを残す部分もありましたが、自分自身の成長はとても感じることができました。



今回のボランティアで色んなものを与えられるばかりだった私が東京に帰ってできることは、自分の目でみて、耳で聞いて、体験したすべてを周りに伝え、何度も大船渡や越喜来に訪れることだと考えています。

文学部4年



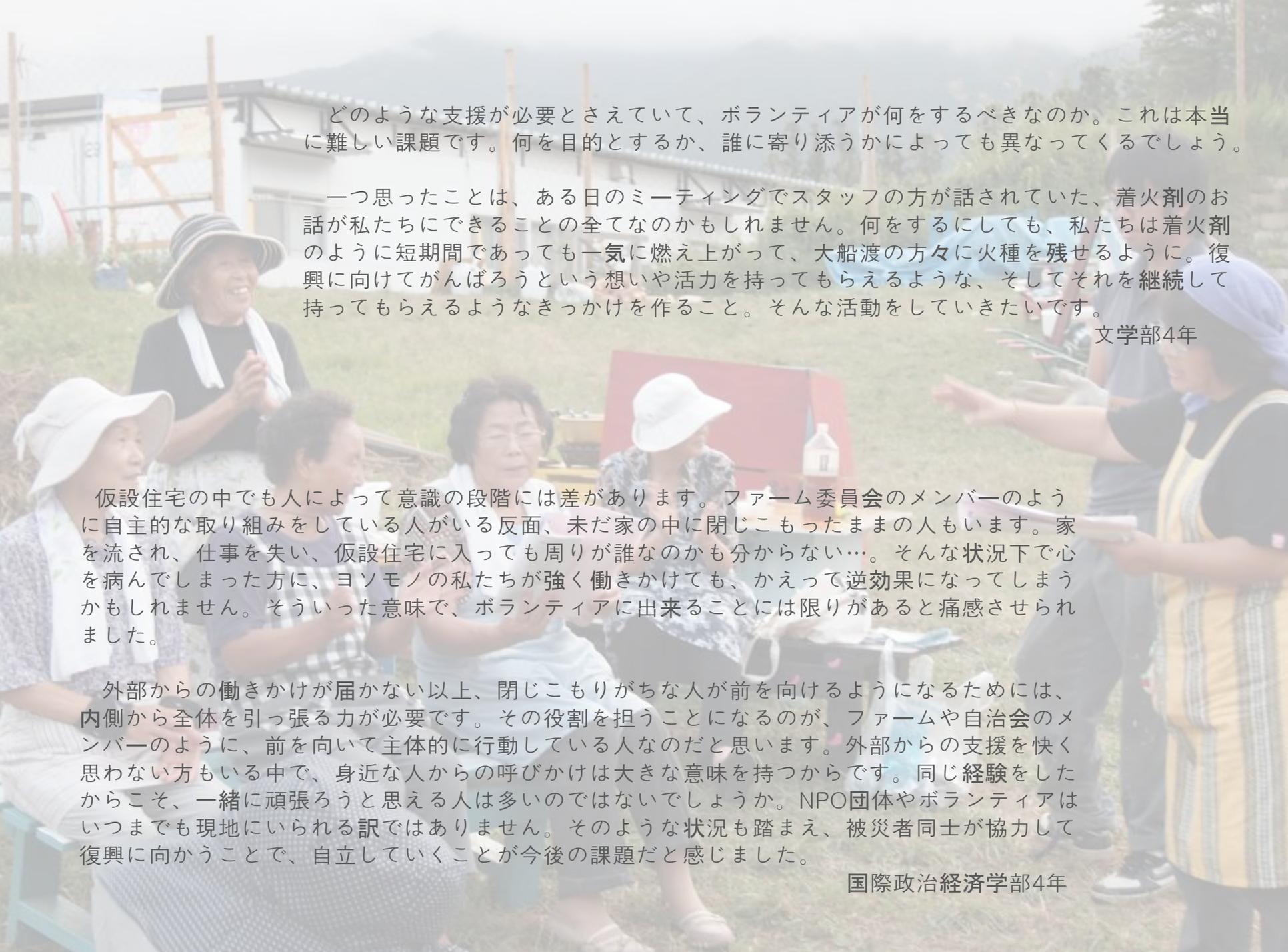
以前よりも**会う人、会う人**の表情が明るくたくさんの笑顔が見られとても嬉しかったです。話を聞いていると、長洞仮設住宅の中では自治会、婦人部、友結ファーム委員会の方々が率先して活動し、仮設住宅内でのコミュニティ形成、みんなが集まれる場の提供をしているという事が聞けて少しずつ少しずつ**団結力**が生まれ始めて復興に向かっているのかなと思いました。そういったポジティブで前向きな方々のエネルギーは本当に大切に、周りの人の背中を押すことができ、プラスの影響力が**伝わって**いくことにより**着実**により方向に向かっていると感じました。

しかしそれと同時に、新しくわかったこともありました。呼び掛けをしている時に様々な年代の方と話を**する機会**があり、私は仕事をしている30代くらいの人とお話をしました。その人の話によると、**集会所**や多くの場所で様々な催し物などが開催されているがそういったものは**孤独死**や外に出て行く**機会**の少ない高齢者を**対象**にしているのであって、自分たちのような人々は**対象**ではないと思うので行きにくいというお話でした。他の仕事をしている人々がどのように考えているかはわかりませんが、このように考えている人もいるのだということを知りました。

年代の垣根を越えてたくさんの人が集える場・交流できる場を提供できるようにしていくことが今後の課題であると感じました。今回活動をしていて小さい子供の笑顔がおじいちゃんの心を和ませ、その和やかな**雰囲気**によって周りの**雰囲気**も良くなる。そういった連鎖が自然と人と人を結びつけていっていたのです。

国際政治経済学部4年





どのような支援が必要とさえいて、ボランティアが何をすべきなのか。これは本当に難しい課題です。何を目的とするか、誰に寄り添うかによっても異なってくるでしょう。

一つ思ったことは、ある日のミーティングでスタッフの方が話されていた、着火剤のお話が私たちにできることの全てなのかもしれません。何をするにしても、私たちは着火剤のように短期間であっても一気に燃え上がって、大船渡の方々に火種を残せるように。復興に向けてがんばろうという想いや活力を持ってもらえるような、そしてそれを継続して持ってもらえるようなきっかけを作ること。そんな活動をしていきたいです。

文学部4年

仮設住宅の中でも人によって意識の段階には差があります。ファーム委員会のメンバーのように自主的な取り組みをしている人がいる反面、未だ家の中に閉じこもったままの人もあります。家を流され、仕事を失い、仮設住宅に入っても周りが誰なのかも分からない…。そんな状況下で心を病んでしまった方に、ヨソモノの私たちが強く働きかけても、かえって逆効果になってしまうかもしれません。そういった意味で、ボランティアに出来ることには限りがあると痛感させられました。

外部からの働きかけが届かない以上、閉じこもりがちの人が前を向けるようになるためには、内側から全体を引っ張る力が必要です。その役割を担うことになるのが、ファームや自治会のメンバーのように、前を向いて主体的に行動している人なのだと思います。外部からの支援を快く思わない方もいる中で、身近な人からの呼びかけは大きな意味を持つからです。同じ経験をしたからこそ、一緒に頑張ろうと思える人は多いのではないのでしょうか。NPO団体やボランティアはいつまでも現地にいられる訳ではありません。そのような状況も踏まえ、被災者同士が協力して復興に向かうことで、自立していくことが今後の課題だと感じました。

国際政治経済学部4年

